

する。

## 〈主題II〉

### 人工関節周辺骨折の治療の工夫について

座長：竹内 公彦（伊勢崎福島病院 整形外科）

#### 8. 人工膝関節置換術後に大腿骨顆上骨折を生じた関節リウマチの一例

橋 昌宏, 岡邨 興一, 米本由木夫

大倉 千幸, 小林 勉, 高岸 憲二

（群馬大院・医・整形外科）

【目的】 左人工膝関節置換術 (TKA) 後に顆上骨折を生じた関節リウマチ (RA) の一例を経験したので報告する。【症例】 81歳女性。2008年にRAと診断され近医にて加療されていたが、両膝関節痛のため2010年1月に当院当科紹介受診となり両側TKAを施行し、独歩にて自宅退院となった。2011年9月、自宅庭にて転倒し当院へ救急搬送された。Xp上左大腿骨コンポーネント近位に転位のある骨折を認め、逆行性随内釘を利用して観血的整復固定術を施行した。経過は良好で骨癒合し独歩にて退院となった。術後に骨粗鬆症の評価を行ったところ、胸腰椎に多発圧迫骨折を認め、大腿骨頸部骨密度YAM44%であったため、術後定期診察とともに骨粗鬆症治療を継続して行っている。【考察】 本症例はRAを合併した高齢患者であり、転倒および骨折の危険性が高いと考えられる事から、インプラント周囲骨折を起こす前から骨粗鬆症に対する治療を積極的に行うべきであったと考えられる。高齢者に対して人工関節置換術を施行する際には、合併すると考えられる骨粗鬆症に対する治療を積極的に行うことが重要であると考えられた。

#### 9. 人工股関節再置換術後大腿骨骨幹部骨折に対して横止めスクリューを有するロングステムによって再々置換術を施行した1例

坂根 英夫, 割田 敏朗, 喜多川孝欽

高岸 憲二（群馬大院・医・整形外科）

佐藤 貴久（公立富岡総合病院 整形外科）

【はじめに】 人工股関節置換術 (以下, THA) 後の大腿骨骨折はゆるみに応じて骨接合術や再置換術が選択される。THA後の大腿骨骨折に対してデルタ-LOCKステムで再置換術を行った1例を報告する。【症例】 受傷時年齢78歳の女性である。両側二次性変形性股関節症

に対して46歳で右、左の順にTHAを受け、66歳で左骨盤側、69歳で右全て、の再置換術を受けた。さらに77歳で左大腿骨側に再々置換術を受けた。右大腿骨側に再びゆるみの所見を認め、左再々置換術後1年に再々置換術を予定したが術後9ヶ月時に転倒し、右大腿骨骨幹部骨折 Vancouver 分類 type B2 を受傷した。横止めスクリューを有するロングステムで再々置換術を行い、術後2日から歩行訓練を開始した。術後1年までに骨癒合が得られ、ほぼ受傷以前の生活に復帰している。【考察・結語】 高齢・既往から早期離床がより望ましく、遠位骨片側に十分な横止めスクリューを設置可能なデルタ-LOCKステムは有用だった。

#### 10. 人工膝単顆置換術後の脛骨内顆骨折に対する治療法の検討

橋本 章吾, 萩原 敬一, 寺内 正紀

小林 亮一, 中川 由美, 堤 智史

（群馬中央総合病院 整形外科）

畑山 和久（堀江病院 整形外科）

症例は77歳、女性。5年前より続く両膝痛があり、平成24年8月に当科初診。左膝優位に関節痛があり、レントゲンで左大腿骨脛骨角186°の内反変形を認めた。MRIで前十字靭帯の連続性は良好で、外側コンパートメントは保たれており、人工膝単顆置換術 (以下 UKA) を選択した。平成24年12月16日にUKAを施行。平成24年12月30日に試験外泊を行ったところ、平成25年1月2日に左膝痛が出現し帰院した。レントゲンにて左脛骨内顆に骨折を認め、骨片は抹消に転位し後傾が増大したため、骨折部に対してプレート固定を行った。固定性は良好で、術後脛骨後傾も改善した。術後は4週より部分荷重を開始した。術後1年時、左膝脛骨の骨癒合は良好で、疼痛も無く経過は良好である。UKA後の脛骨内顆骨折において、保存療法、プレート固定、TKAによる再置換など種々の方法がある。しかし報告例は少なく、症例に応じた対応が必要と考える。

#### 11. 人工股関節置換術後に大腿骨ステム周囲骨折をきたした2症例

高嶺 周平, 小林 敏彦, 佐藤 貴久

土田ひとみ, 原和 比古, 松原 圭介

柘植 和郎（富岡総合病院 整形外科）

当院で人工股関節置換術 (以下 THA) 後ステム周囲骨折2例を経験したので報告する。

【症例1】 84歳女性、両側変形性股関節症。70歳時、左CharnleyTHAを施行。術後8ヶ月、自宅で転倒し左股関節痛にて受診。左人工関節ステム周囲での螺旋骨折であった。(Vancouver分類 type B1)。Dall-Miles wireにて